

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第20号

平成27年12月15日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

義に生き、潔く散った楠正行

一方、家名に生き、しぶとく生き残った細川顕氏

直義の南進命令を受け河内へ

楠正行と最も多く戦った相手の一人、細川顕氏はいったいどのような人物だったのか。

正成が湊川に討死した翌年から足利軍と楠一族による攻防戦が続く。

延元2年1337の3月、大塚惟正、岸和田治氏、八木法達ら楠勢と細川顕氏が戦った記録が残る。同年10月、天野山金剛寺の赤坂合戦でも、武家方大将として細川顕氏が楠軍を挟撃。そして、延元3年5月、堺石津に陣した細川顕氏と戦った北畠顕家はここで戦死する。

大和の開住西阿と攻防を繰り返したのも細川顕氏。

そして、正平2年1347の8月、正行は隅田城攻略を皮切りに戦端を開くことになるが、この時、足利直義の南進命令を受けて前線に登場したのが細川顕氏。

そして、同年9月17日、藤井寺の戦い、11月26日、住吉天王寺の戦いで、足利方の大将をつとめた細川顕氏は正行に大敗を期すことに。

しかし、正平3年1348の1月5日、南朝復権という義のために戦った正行は四條畷の合戦で自刃するが、細川顕氏は家名のためしぶとく生き残り、正平7年1352の5月には、後村上帝を男山に攻め、陥れる。が、同年7月に急死する。

義に生き、潔く散った正行。

一方、家名に生き、しぶとく生き残った顕氏。

河内、和泉、讃岐の守護を兼務

細川顕氏を國史大辞典で調べると、大要、次のように記されている。

南北朝時代の武将。細川頼貞の嫡子。陸奥の守。元弘の乱以来足利尊氏に従って行動し、延元元年2月、一族

とともに四国に派遣され、四国の軍勢を集めて尊氏軍の畿内進攻に合流した。同年8月以来山城・近江・摂津・河内・和泉・大和に転戦して宮軍と戦う傍ら、同年末ごろから河内・和泉・讃岐の守護を兼ね、勢力を強め、侍所頭人として活動している。

正平2年9月楠正行率いる南軍と河内・摂津に戦って連敗し、11月京都まで逃れたため河内・和泉守護を罷免され、高師直一族が変わって守護となり功名を揚げた。

その後顕氏は足利直義に近づいて、貞和5年、自邸に迎え入れた。よく観応元年11月、観応擾乱が起こると、讃岐に渡って軍勢を集め、直義方の先鋒として翌年2月尊氏の布陣した播磨の国書写山に攻め寄せ、直義党優勢裡に和議が結ばれる一因をなし、和泉守護に復した。

しかし同年7月擾乱が再燃すると、直義党から離れてその北国下向に随行せず、尊氏から和議の使者として直義のもとに派遣されたが、和議は不成功に終わった。

翌正平7年閏2月、在京の足利義詮とともに南軍の急襲を避けて近江に逃れ、3月京都奪回に功あり、4月には後村上天皇の男山（石清水八幡宮）の行宮を攻める総大将となり、5月11日是を陥れた。

しかしこの戦いで子息政氏が討死し、続いて7月5日、顕氏自身が急死した。

和歌に精進し、直義が高野山金剛三昧院に奉納した仏名和歌に3首みえ、「風雅和歌集」以下の勅撰集に7首入選している。

熊本藩主は外様雄藩として明治維新まで

細川氏は、清和源氏、足利氏の支族。遠祖は足利義康の子、義清で、その孫義季が三河の国額田郡細川郷（愛知県岡崎市）に移って、細川氏を名字とした。

細川氏は、京兆家、和泉半国守護家（上守護家）、阿

波守護家、備中守護家、和泉半国守護家（下守護家）、淡路守護家、奥州家、肥後の国熊本藩主等、一族でほぼ8カ国の守護となり、同族連合を形成し、幕府内に有力な地位を占めた。

奥州家は、細川頼氏の養子業氏を初代とし、頼氏以来、代々の当主は陸奥の守に任じられたので、奥州家と呼んだ。

また、肥後の国熊本藩主は、細川家中興の祖藤孝（幽齋）の嫡孫で、忠興の嫡子忠利が初代藩主。信長、秀吉、家康に仕え、寛永9年加藤清正の嫡子忠弘改易の後の肥後の国熊本を加藤家から引き継ぎ、以来、外様雄藩の藩主として明治維新にいたった。

義一筋に生き、潔く散った楠一族。

楠に敗れはしたものの、今も血筋の残る細川氏。

昭和30（1955）年3月28日、東京都指定旧跡となっています。

飯盛山山頂に建つ小楠公像

会員の安井さんから「飯盛山山頂に立つ小楠公像と黒岩淡哉」の資料を提供いただきました。

資料によると大要以下の通りです。

昭和10年1935楠正行（小楠公）の銅像建立の機運高まり、小楠公会が設立されます。



建立の経費は、北河内郡内の小学校児童約2万人による「1日1銭献金」や北河内郡以外の小学校や中学校の児童・生徒、教員、府民有志ら延べ22万人から総額1万5962円22銭が寄せられます。

黒岩淡哉に製作が依頼され、銅像の原型が完成したのは、昭和12年1937の2月でした。銅像は、正行が四條畷の戦いへの出陣に際し、吉野山如意輪寺の板戸に辞世の句を認め、その筆跡を見つめる姿を写したもので、高さ1丈2尺（一説には1丈3尺とも：約3m60cm～4m）、総重量約600貫（約2250kg）です。

正行像は、2台の牛車を使い、毎日30人余りの作業員と郡内の各小学校の児童50人ずつが作業に従事し、ウインチでジリジリと少しずつ引き上げました。

礎石の下には日蓮宗楠公庵尼僧（伊藤妙信尼）の法華経の写経（八万余文字）の一部が納入され、昭和12年9月23日、除幕式が行われました。

しかし、戦争が激化する中、昭和18年1943に台座を残して銅像は回収されます。

現在立っている銅像は、昭和47年1972に再建されたものです。（四條畷高校蔵の小楠公像を拡大複製）

なお、昭和58年1983にはJR四條畷駅にも小楠公像が寄贈されました。また、昭和42年1967には、小楠公像のミニチュア像（飯盛山上の小楠公像の小型像を黒岩淡哉の遺族所有）が四條畷高校同窓会に寄贈されています。

黒岩淡哉

明治5年1872—昭和38年1963

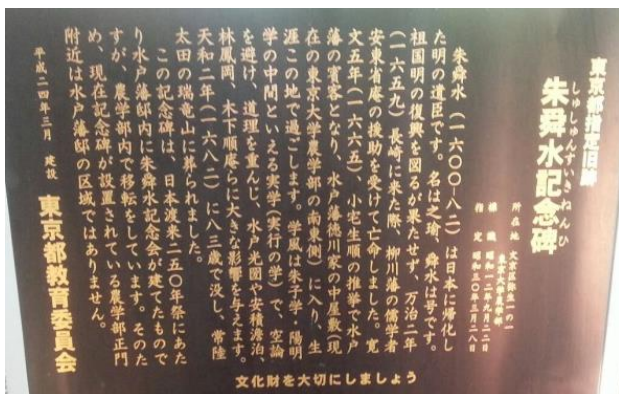
東京芝に生まれ、明治27年東京美術学校卒業。東京美術学校で教鞭をとった後、大阪府立職工学校教諭として赴任。昭和6年大阪府立西野田職工学校を退職後、守口市にアトリエを構える。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）

朱舜水先生終焉の地碑訪問記

会員の国府夫妻が上京し、東京大学農学部構内に残る朱舜水の終焉の地碑を訪ねました。

以下は、朱舜水記念碑の現地説明版（国府氏撮影・一部拡大写真）とその大要です。



朱舜水(1600～1682)は、日本に帰化した明の遺臣です。名は之瑜、舜水は号です。

祖国明朝の復興運動を図りますが果たせず、万治2（1659）年長崎に来た際、柳川藩の儒学者安東省庵の援助を受けて亡命しました。

寛文5（1665）年、小宅生順の推挙で水戸藩の賓客となり、水戸藩徳川家の中屋敷（現在の東京大学農学部の南東側）に入り、生涯この地で過ごしました。学風は朱子学・陽明学の中間に位置する実学（実行の学）で、空論を避け、道理を重んじ、水戸光圀や安積澹泊、林鳳岡、木下順庵らに大きな影響を与えました。

天和2（1682）年に83歳で没し、常陸太田の瑞竜山に葬られました。

この記念碑は、日本渡来250年祭にあたり水戸藩邸内に朱舜水記念会が建てたものですが、農学部内で移転しています。そのため、現在記念碑が設置されている農学部正門附近は水戸藩邸の区域ではありません。